

### 1.はじめに

月日が経つことは早く、帰国しなければならない時期になりました。ロチェスター工科大学での滞在を含めて、8 か月間はこれまでにない充実したものであった。期待と不安がいり混ざっていた当初に比べて、去るのが名残惜しい気持ちでいっぱいである。

留学して気づくことは、自分の力で生活していく上で限りがある。特に、イベント等の情報の収集やキャンパス外への移動である。よく留学前によく言われたが、自分から何をしたいのか発信することが大事だということを改めて実感した。またそこから、行動できる範囲が広がることができる。私はそれによって、キャンパス外の人たちと交流することができた。今までを振り返って、支えてくださった多くの人々に感謝したい。

### 2.何を得たのか

普段の生活の中で、劇的に何かが変わるということはない。ただ、日々少しずつ何かを変えて、何かを意識し続けることで自分では実感がない部分で成長している。特に、この留学生活ではそうだった。英語で人と会話し、新しい科目に挑戦したことは、自分にとって大きなプラスである。私自身を大きくさせてくれる 8 か月であった。

毎日が日本では味わうことができない刺激的な生活を送ることができ、すべてが貴重な体験であった。そのため普段から些細なことから学ぶべきことがあり、得るものはたくさんあった。ただ、留学当初と比較すると、大きく成長したとを感じるものが 3 つある。1 つ目は、英語力の上達である。英語だけの生活をしていると、目から耳から口から英語をふれるので、自然と上達した。また、常に英語と触れ合っているのも、口から出るのは英語になったことは体に英語がしみ込んでいる証拠ではないだろうか。

口に出してみることはとても大事であるが、まず聞くことから始めた方がいいと感じた。その理由は、英語に関する単語量や表現の仕方はアメリカの方が絶対に知っているため、彼らから学ぶことが効果的だと考える。また、彼らも何回も繰り返す表現があるので、私はそれらを学んで自分で使ってみることを繰り返した。

2 つ目に、私は電子情報通信工学科のハードウェアとソフトウェアに関しての知識を新たに得た。同じ学科であっても、学ぶ内容は違った。初めて知る内容もあり、更に知識の層が増えた。特に、ソフトウェア面を学習できたことはよかった。私は、C 言語を冬学期に学び、知識を持つだけでなく、LAB で C 言語のコードを考え、試すことができた。周りの学生に比べれば、未熟者で講義についていくことが精一杯だったので、他の人たちに聞くことが多かったが、それがさらに理解につながった。

最後の 3 つ目は、私が出たということではないが、考え方が変わった。考え方というのは、ある物事に対して鵜呑みにしないで、どのようにいつ使うのかその物事の使いどころを考えることができるようになった。特に LAB において、今まで学習したことを用いて行うわけだが、そのままの形では使えないことが多かった。そのため、どのように変形したらよいか考える習慣がついた。今までは、意味を覚えるという感じで細かい部分に焦点を当てすぎていたが、理解するために大きな範囲で見ることに意識が変わった。

ローズハルマン工科大学に留学して 6 か月経つが、自分で成長したなど実感できたのは、12 月や 1 月からである。どんなことでも成長や結果が出るのは、時間がかかる。その間に折れない心が必要かもしれない。

### 3.できることから始めよう

留学して思ったことは、日本人は英語をしゃべることが苦手である。同じアジア圏でも、中国や韓国の人は、私よりも英語を扱っている。もちろんアメリカで生まれ育った人もいるが、自国の高校ですべて英語を使って生活していたという人もいた。重要なのは、英語をどれだけ勉強したこと

ではない。どれだけ英語を頭で考えて、使うことができているかである。ほかの留学生は、英語を使うことで、英語力を高めている。われわれ日本人は、テストのために英語を勉強して感覚があり、実際に外国人に会って、英語が使えるかどうかは不明である。

そのため英語ができたと思えても、世界レベルで考えるとまだまだ下のレベルでの成長である。ただ、英語が第一言語ではない人はこのような状況を持っていた。そのような人たちが、英語を不自由なく使えることができるようになるということは、そのようになることができたプロセスは、私たちにも通用することができるはずである。英語を学ぶよりも使うことを意識することが大事だと留学中に感じた。

成果が出るのは、時間がかかる。簡単に英語が話せるわけではない。背伸びをせずに、今できることを地道に積み上げていくことが一番成果の出る早道かもしれない。

#### 4.終わりに

振り返ればあっという間の留学生活だった。多くの人と関わることができ、とても楽しかった。離れるのがさみしい気持ちもあります。さまざまな人から、目標や夢を聴いて、自分の背中を押された。これから自分自身成長できるように精進していきます。

最後に、このような貴重な機会をくださったローズハルマン工科大学と金沢工業大学の石川憲一学長、佐藤恵一副部長、大澤敏教務部長、札幌順教授、野口啓介電気系副主任、坂本康正教授をはじめとした多くの先生方、国際交流室の皆様方、また資金的な援助をしていただいた金沢工業大学理事長に感謝の意を表し、2月分の月例報告書のまとめとする。